

内職

昭和六十年 度 五年 男児

ぼくのお母さんは、前に内職をしていました。お母さんの仕事は、とてもかんたんそうだったので、ぼくは、

「そんなかんたんだなして、お金もらわいなや。」と思いましたが、しばらくお母さんの仕事を見ていたら、ぼくもしてみたくなったので、お母さんに、

「おいもすっから、お金ちょうだい。」と言って、内職の部品を百五十円分わけてもらいました。そしたら、ビニールぶくろにいっぱいでした。ぼくはあまりの多さにびっくりして、

「こったげ、いっぺ、やんなさ、なんで百五十円しかもらわんねな。」と、さげんでしまいました。そしたら、お母さんから、

「お金もらうごとしてたいへんだろ。」と言われてしまいました。ぼくは、ほんとうにたいへんな仕事だなあと思いました。

いよいよ仕事開始です。部品がたくさんありすぎて、なかなかやる気が出ません。でも、「きょう中に出来ればあしたやらなくてもいいなあ。」と思って今日中にかそうとしました。しかし、テレビを見たりしてしまって半分も出来ませんでした。

そして、次の日、「きょうこそは、絶対でかしてやるぞ。」という気持らでがんばりました。テレビもあんまり見ないようにして、いっしょうけんめいやりました。

そしたら、お母さんから、
「あしたもあさってもあんなながら、あどやめれ。」と言われしました。ぼくは、きょう中に出来るかどうかからないけど、ちよう戦してみました。目がいたくなったり、首がいたくなったりしました。今日も出来そうにありません。ぼくは、急にあちこちがいたくなってきたような気がしてきました。

「もうだめだ。」とあきらめかけていたところへ、お母さんが手伝いにきてくれました。お母さんのおかげでぼくもやる気が出てきました。一つ、二つ、…と、部品はどん

どん少なくなっていきました。

「お母さん、あとひとつだけだ。」いよいよ、全部出来たのです。きょう中に出来ないと思っていたのに、出来たので、ぼくは、とびあがるほどうれしかったです。お母さんから、

「首いでぐねが。」と言われたら、急に目と首がいたくなりました。自分でも、「あんなに多かったのによく出来たなあ。」と思いました。

最初、ぼくは、内職なんてかんたんな仕事だと思っていました。百五十円もらうだけで、あんなにつかれるとは思ってもみませんでした。お父さんたちは、内職じゃなくて働いているんだから、もっともつつかれるし、たいへんなんだなあということを知りました。だから、おだ使いをする、と、

「おだ使いすんな。お金っていだましあんぞ。」と、お母さんたちは言うんだなあと思いました。これからは、お金をかんたんに使ったり、おだ使いをしたりできないなあと思いました。